

木づかい推進月間

多彩なイベントを全国各地で開催

これって
国産材の
割り箸かな？

↓

その「木づかい」
とってもエコです。



温暖化防止へ。「木づかい」ニッポン。

いま日本で、手入れの行き届かない森が増えているをご存知ですか、きちんと間伐することで、森は元気を取り戻し、CO₂をどんどん吸収。ということは温暖化防止にもつながります。「木づかい」は、生活の中に国産材の製品を取り入れて元気を育てる運動、マイ箸にはもちろん、割り箸に国産材を使うよう心がけることも、実は立派な「木づかい」です。

国産材、使って減らそうCO₂
3.9
GREENSTYLE

「木づかい」を通じて、「美しい森林づくり推進国民運動」に参加しましょう。

林野庁 NPO法人 日本国産材の森ネットワーク

木づかい.com

我が国の森林資源は、人工林を中心に充実しつつありますが、木材自給率は依然二割と低い水準です。国産材が利用されないことが、間伐の遅れなど、森林が有する多様な公益的機能の発揮に悪影響を及ぼしています。

このような状況を踏まえ、木材、とりわけ国産材の利用の意義を広め、実需の拡大につなげていくため、平成一七年度から国産材利用に関する普及啓発活動を強化し、国民運動として「木づかい運動」を行っています。

とりわけ、毎年一〇月は「木づかい推進月間」として、全国各地で木づかいの推進に向けた行事やイベントが開催されます。

身近なイベントに参加して、木づかいの大切さを実感してみませんか。



これからの木づかい関連のイベント・行事

木づかい運動関連

木づかい推進月間中は、「木づかい」の推進を呼び掛けるメッセージをラジオで発信するほか、「木づかい」をテーマとした展示を開催します。

<ラジオ放送>

●東京FM

10月の毎週月曜日の番組「Blue Ocean」の中で「木づかいインフォメーション」を放送します。

オンエア日：10月5、12、19、26の各日
オンエア時間：午前中

さらに、10月12日は「木づかいインフォメーション」の拡大版として安藤直人東京大学大学院教授がゲストで登場し、「木づかい運動」の概要をわかりやすく語ります。

●大阪FM

「LOVE FLAP」内のECO FLAPコーナーで「木づかい運動」を紹介します。

オンエア日：10月1、8、15、22、29の各日
オンエア時間：13時00分から15時48分までの間

●JFN(ジャパンFMネットワーク38局)

「木づかい運動」を普及啓発するためのCMを放送します。

オンエア日：10月2日(金)
オンエア時間：11時27分頃

<展示の開催>

●10月3日(土)～4日(日)

大阪・堀江地区一帯を会場として開催される堀江音楽祭に「木づかい」ブースを出展します。木づかいブックの配布やパネル展示、国産材製品の紹介などを行います。

●10月19日(月)～23日(金)

農林水産省内の展示スペース「消費者の部屋」で「木づかい運動」のPRを行います。

国産材住宅普及推進キャンペーン

国産材を利用した住宅に対する関心が高まりつつあります。人にやさしい国産材の魅力をお伝えするとともに、地域産業の活性化や地球環境の保全にもつながる「国産材での家づくり」に関する様々な活動を展開します。

<テレビ放映>

●BS JAPAN 特別番組放送

11月22日(土) 18時00分から18時30分
(再)12月5日(土) 23時30分から24時00分

国産材住宅を取り上げた特別番組を放送します。国産材住宅の優れた点や建築事例などを紹介します。

<イベントの開催>

●9月23日(水)～26日(土)

イベント名：日経住まいのリフォーム博2009
場 所：東京ビッグサイト

●10月1日(木)～4日(日)

イベント名：第21回 住生活月間中央イベント
場 所：東京国際フォーラム B1 ロビーギャラリー

●11月11日(水)～13日(金)

イベント名：ジャパンホームショー 2009
場 所：東京ビッグサイト

●12月10日(木)～12日(土)

イベント名：エコプロダクツ2009
場 所：東京ビッグサイト

●2010年3月9日(火)～12日(金)

イベント名：建築・建材展2010
場 所：東京ビッグサイト

～ずっと住むなら、やっぱり日本の木～

日本の木のいえ情報ナビ

<http://www.nihon-kinoie.jp/>

国産材を使った住宅づくりに関する様々な情報を提供するポータルサイトです
※10月にサイトのリニューアルを行います

日本の木のいえ中央相談窓口

TEL.03-3585-9311
(財) 日本住宅・木材技術センター内



木づかいの取組 株式会社 内田洋行

株 式会社内田洋行は明治四三年に創業され、来年の二〇一〇年に一〇〇周年を迎えるオフィス・教育機器の大手商社です。

内田洋行のオフィスには、スギの柱や間柱といったムクの製材品がふんだんに使用されており、コピーやプリンターなどの機械類も木製のパーティションで囲まれています。(写真1) また、机等が配置されているワーキングスペースでも、通路と個人のスペースを区切る間仕切りの上部にはヒノキの柱材が横使いで配され、目隠し効果も担っています。(写真2)

「従来のオフィスでは機能性だけが重視され、スチール家具が主体のレイアウトとなっていました。しかしながら最近ではノートパソコンと



細井テクニカルデザインセンター長

携帯電話の普及で空間の流動性が増し、スタッフが占有する部分は最小



写真1 木製のパーティション



写真2 ヒノキの柱材が目隠し効果

限で済む一方、身近なところにミーティングなどのための共有スペースを設置する必要性が生じてきました。当社では、こうした共有スペースで簡単な飲食まで出来るようなシステムを提案しています。そして、このような空間には、自然素材である木

材が非常に有効となっています」と語るのは同社マーケティング本部開発統括部のテクニカルデザインセンター長を勤める細井康晴氏です。

同社は、事務所の中に自由に空



写真3 木材を随所にアレンジしたスマートインフィルの提案例

間をつくる「スマート・インフィル」(写真3)という空間提案を行っています。アルミの枠組に木材を視覚的に組み合わせ、無機質ではない柔らかな空間の事務所が形作られており、「これからもオフィス空間に木材を積極的に取り入れていきたい」(細井センター長)と、木材の使用に積極的です。ただし、木材にも取り扱う際の課題はあるようで、「嵩が大きいこととメンテナンスの際に部材の補充が必要となるのが汎用化にあたってのネックですが、フレームはアルミの規格品に対応し、木材はそれぞれの地域で規格に合った部材を調達するという方法で弱点の克服が可能です」と、地産地消ともいえる考え

方を示しています。

また、同社では、地場産材を活用したモノづくりを通して地域コミュニティを応援する活動『日本全国杉ダラケ倶楽部』を支援しています。社内にはいたるところにスギ柱角を使ってデザインされた『スギダラケ家具』が置かれており、今年一月には地場のスギ材にスチールの脚部材を組み合わせた新製品『アシカラ』(写真4)を発売しました。



写真4 新製品のアシカラ

さらに、同社は日本木材青壮年団体連合会と協力して、木のPRを推進すべく、学校に木の製品を導入した事例などを紹介したカレンダーを作成し、全国の小中学校に四万セット配布するなど、木づかいをサポートする多様な事業活動を展開しています。

木づかいの取組 東京おもちゃ美術館

NP O 法人日本グッド・トイ委員会が運営する『東京おもちゃ美術館』は、平成一九年三月に一〇〇年の歴史を閉じた四谷第四小学校の校舎を利用して、平成二〇年四月に開館しました。

「日本のおもちゃは九五%が中国製で、日本で作られ日本の木材が素材に使用されているものは少数な」と言われています。このため、東京おもちゃ美術館の開館にあたっては、木という素材にこだわり、しかも、日本の木で、日本の職人さんが作ったものを展示・紹介していかうと考えました。人が最も心地よく感じるものはひとの肌で、とくに子どもたちにとってはお母さんとのふれ



「どんぐりころころ」を手にする多田館長

あいは最高のものです。そして、その次が木であり、木は肌触りや温もり、においといった五感で楽しめず。とくに乳幼児にとっては是非とも触れさせたい素材です」と語るのは東京おもちゃ美術館の館長を勤める多田千尋さんです。この多田さんが美術館開館にあたって一番苦心したのが、日本の素材を使い、日本で生産されたおもちゃを集めることでした。「国土の三分の二を森林が占め、木材を加工する世界屈指の技術を持つていながら、身近な素材で作られたおもちゃがない」という嘆きが、逆に美術館開館にあたっての「こだわり」となりました。

日本グッド・トイ委員会は、「グッド・トイ」という優れたおもちゃを選定する制度を二〇年以上にわたって運営しています。また、全国で約四千人の方々が「おもちゃコンサルタント」として登録されています。今回の美術館開館に当たっては、こうしたグッド・トイの実績やおもちゃコンサルタントを通じて全国か

ら七五名の職人・作家による約七百点の作品を収集し、国内最大の「国産材を素材としたおもちゃショップ」を実現しました。

美術館では木のおもちゃだけでなく、鹿児島産のヒノキを使った帆柱が美術館前のポールとして飾られており、また、九州産のヒノキのフーリングや津軽産のスギ材を使ったセンターハウス、北海道産の広葉樹から作られた木玉二万個の木の砂場など、全国各地の木材がふんだんに使われています。このような国産材を用いた製品作りは多田さんのおもちゃづくりの考え方にも通じており、多田さんは「食べ物で地産地消が叫ばれていますが、おもちゃでも地産地消をもっと進めるべきです。地産地消は地元への経済的な波及効果ばかりでなく、製造者が身近に特



積木のサポーターズボード



おもちゃのまち



木のおもちゃ

定できることから製造者責任がより明確となり、安心できるおもちゃが供給されるといった波及効果が期待できます」と説明します。

多田さんのこれからの木づかいにむけた構想は「第一段階が木のおもちゃ、第二段階は学校給食での木の食器導入、第三段階は学校での木の机や椅子の普及、第四段階は木造校舎、というように、段階的に木材利用を進めていきたいと思っています。子どもたちに木に触れる機会を増やしてあげること、これが木育の前提だと考えています」と語っています。